

講談で自分史を語ってみよう

伝統芸能コース

講談



講師 旭堂 南青
きよくどう なんせい

略歴

講談師

上方講談協会所属。府立東住吉高校芸能文化科出身。近畿大学卒業と同時に旭堂南左衛門に弟子入り。06年以来、桂春菜との「はるなんせい」、桂三四郎との「男前寄席」など、精力的に活動を続けている。08年4月、ネタおろしの3席を披露した「旭堂南青・武者修行の会」の様子がNHKテレビに取り上げられた。

advice points

- 高座を設置できる舞台などがある会場が望ましい。
- 時代小説や歴史番組などで、講談のイメージをつかんでおくといい。

目的

- ・ 講談がもつ話芸の深み・おもしろさを知る。
- ・ 独特の調子で、世界に一つしかない「自分史」を作る。

効果

- ・ 史実に関わった人物や情景を、視覚的情報に頼らず頭の中で想像して物語を理解するという、話芸独特の楽しみを知る。

到達点

- ・ 講談は大衆芸能の1つで、決して難しいものではないことを認識する。



事前学習

授業等で、講談の歴史や落語との違いなどを学んでおく。

ワークショップの流れ (2日間<1コマ/日>)

講談師になるまでの人生について講話



講談師の歴史とその仕事について講話



講師の演技鑑賞



講談独特の調子を理解し、「自分史」をつくる



それぞれが「自分史」を発表。講評とアドバイス

事後学習

オリジナルの講談をつくって発表する。

…ワークショップを実施して…

講師の感想

生徒たちは、時には真剣に、時には笑顔で実演や講話に聴き入り、講談を楽しんでくれた。「続きが聴きたかった」という多くの声に、講談の魅力が伝わったと同時に、講談は堅苦しいとか、おもしろくないというイメージが払拭できたと実感した。今後は、歴史が苦手な生徒でも興味をもって、想像をふくらませることができるような工夫をしていきたい。

先生の感想

古典芸能をはじめとする様々な芸術を伝えるため、多方面な取り組みを行っているので、非常にありがたい機会だった。講談の体験を通じて、芸能の奥深さや楽しさに触れるとともに、芸能文化を学ぶ生徒としての自覚が強まったようだ。今回の成果と反省点をしっかり検討して、日々の学習に生かしていくのが教員の仕事だと思う。

生徒の感想

- ・ 講談は爆笑する話芸ではなく、綺麗なオチですっきり終わるという古典芸能のよさがわかった。
- ・ 歴史が好きなので、豊田秀吉の時代のことなど、興味のある話題がいっぱいで楽しかった。
- ・ みんなの前で、緊張感と爽快感を感じながら話してみても、講談に親しみとおもしろさを感じた。
- ・ 自分の夢について、自信をもって、恥ずかしがらずに言えるようになりたいと思った。

より発展的なワークショップを実施するために

- 社会科や国語科の授業で、有名な講談の時代背景などを学んでおくとう理解が深まる。
- 歴史ドラマや、歴史の特集番組等を見ておくとう身近に感じやすい。